

野口富士男の八木義徳宛書簡から

保坂 雅子

山梨県立文学館の常設展には、山梨ゆかりの文学者として野口富士男の盟友八木義徳（一九二一―一九九九）を紹介するケースが設けられている。八木は、北海道室蘭で生まれたが、父親は現在の山梨県笛吹市春日居町の出身である。さらに正子夫人が現在の南アルプス市出身ということもあり、八木の小説や随筆には、しばしば山梨が登場する。

二〇二一（令和三）年十一月、職員が講師をつとめる講座で「励まし、励まされ 八木義徳と野口富士男―書簡を軸に」と題して、話をさせていただいた時に、野口富士男のご子息平井一葵さんが、わざわざ足を運んでくださった。講座終了後に、常設展の八木のケースに展示された野口の書簡を見ながら、二人の筆跡の違いや、平井さんがこれから整理に着手する野口の資料についてお話を伺った。

当館では、二〇〇三（平成十五）年より、随時、正子夫人から八木の原稿や八木宛書簡、写真など数々の資料を寄贈いただいた。中でも野口の八木宛書簡は、作品評を含む重要な内容だったので、翻刻し、註を付して当館の紀要「資料と研究」第十三輯（二〇〇八年三月）に掲載した。その際に、公表の許可を得るため、平井さんに連絡したことが、二〇二一（令和三）年五月に田畑書店から刊行された『八木義徳 野口富士男 往復書簡集』（以下『書簡集』）のお手伝いをさせていただくきっかけとなった。「資料と研究」第十三輯

字で書かれている。その頃、野口は体調を崩していたが、日本文藝家協会の理事として、山崎豊子の盗作問題の対応のほか、「風景」の編集など、創作以外の仕事に時間と労力を費やし、心身ともに疲弊していた。そんな状況でも、八木の新作を読了後、直ちに懇切丁寧な感想を書き送っている。一九七三（昭和四十八）年十一月十四日に認めた書簡には、「兄の諸作の中でも、秀作のひとつ」と定義しつつ、最後の場面について、自分が「耳のなかの風の声」で平野謙に批評されて悔しい思いをしたことを伝えながら、末尾の十行ほどの記述が、作りものに読めてしまうと指摘している。書簡の後半では、「ある酒詩人の死」でも触れていた現在と過去との転換に見せる技術を評価し、「もう何十年も書いていながら、いまだに時間の順序にか小説が書けないばかりは羨ましいような作品でした」と述べている。

車軸が錆びついていた列車も、すこし走り出せば、あとはもう走りつづけるものです、乗客のひとりとして、快調だなと感じました。

書簡の最後に寄せた言葉は、誰の激励よりも八木の胸に響いたに違いない。八木は、この書簡の返信（同年十一月十九日 野口富士男文庫蔵）で、指摘された最後の部分は、自分でも「つくりものめいた感じが露骨に」なる予感がありながら、小説の「形」に囚われすぎて、「結」の部分無理やり辻褄を合わせてしまう癖が出てしまったと打ち明けている。「胡桃」は、「文芸」の編集長である寺田博に百枚の執筆を依頼されながら書けずにいたが、野口から枚数を半分にしてもらってはどうかと助言を受け、書き上げた作品だった。

『書簡集』の「解説 小説と死を見つめて」の中で、平山周吉氏

では、封書四点、葉書五点だったが、『書簡集』には、封書を一点加えた十点の野口書簡が収録されている。十点の内、八木の小説について書かれた書簡が三点あるが、ここで二点について簡単に紹介させていただく。

一九六九（昭和四十四）年九月八日付の葉書は、同年十月発行の「文藝界」第二十三巻第十号に発表された「ある酒詩人の死」の感想を記している。当時、野口は、まだ「文藝界」の寄贈者リストに入っていないかつたため、みずから購入して八木の新作を読んでいる。

これだけの枚数の作品がみごとにまとまっているのに感心しました、現在と過去との巧みな転換、ともすれば駆け足になってしまうほどの作風に比して、どうすれば読者を作品に縛りつけて、現在から逃がさずにおけるのか、そういう方法の上で教えるを受けました、出来ではなく、素材としては「恵山岬」のほうか、ぼくには面白く存ぜられました、しかし、巧さでは、今度のほうが上かと存じます、

野口が指摘するように、本作は詩人の通夜に参列した仲間が詩人との思い出を語る「現在」と、詩人と私との「過去」との切り替わりが巧妙だ。そして、読者は自然に末尾の一篇の詩へと導かれ、詩人の死を納得させられて終わる。八木は、この葉書に対する返信（同年九月十六日 野口富士男文庫蔵）で、むしろ自分の方が駆け足になりがちな作風ではないかと思っていたが、自分のことはわからないうものだと言っている。

もう一点は、一九七三（昭和四十八）年十二月発行の「文芸」第十二巻第十二号に発表された「胡桃」の読後感が書かれた封書である。封書表面に赤鉛筆で「口」19返スミ「胡桃」評「保存」と八木の

が、野口と八木の性格を「繊細と朴訥、几帳面と臆畏、敏感力と鈍感力」と分析し、書き方においても、締め切りまで余裕のある内に少しずつでも書き溜めて、さらに何度も書き直す野口と、「締め切り直前連日徹夜クセ」の八木は、「余りに対照的」と記している。私も『書簡集』の編集時、書簡を通読するたびに、「正反對」とも思える性質や特徴に気付かされ、ここまで違ふ二人が、四十年以上にわたり、励まし合いながら、ともに歩んだことが不思議に思えた。ただ、勝手な推測だが、二人の書簡に通底する「誠実さ」への信頼は、お互いを必要な存在とする大きな要因になっていたのではないだろうか。

『書簡集』に携わる機会を与えていただいたきっかけは、二〇〇八（平成二十）年の「資料と研究」での翻刻だったが、その十年近く前から、当時、当館の館長を務めておられた紅野敏郎先生に、野口富士男の資料が文庫として保存されるお話を伺っていた。「野口富士男文庫」が発行されてからは、登録されると「ここにも届いてる？」と仰つて、持参された冊子を聞きながら、内容や写真のレイアウトだけでなく、野口の小説や評伝などについて毎回、多くのご教示をいただいた。思い返せば、正子夫人や平井さん、そして野口富士男という文学者に導いてくださったのは紅野先生だった。耳を澄ますと紅野先生の叱咤激励と正子夫人の明るい笑い声が聞こえてくる。きつと、平井さんがお二人に『書簡集』の刊行を報告してくださったに違いない。

（山梨県立文学館学芸課長）